

八十歳となられたお釈迦さまは、アーナンダと数名の弟子をともなってラージャガハからサーワッティへと教えの旅をされるのですが、その途中で雨季となり、その歩みをとめます。この時にお釈迦さまには病やまいによる激痛がおこり、床に伏してしまいました。アーナンダはお釈迦さまがそのまま亡くなられるのではと思い動揺します。

そのアーナンダに、お釈迦さまは次のように語りました。

「アーナンダよ、自己を灯しこ明とし、自己を拠り所として、他人を拠り所とせず、法ほうを灯明とし、法を拠り所として住じゅうせよ。」

お釈迦さまがいなくなったとしても、自分自身を拠り所として、教えである「法ほう」を拠り所として修行を続けて行くようにと示されたのです。

その後、お釈迦さまは歩けるまでに回復され、再び旅路につきます。一説には故郷のカピラワットゥをめざしていたとも言われています。

そうしたある日、ある町でチュンダという鍛冶屋かじやから食事の供養を受け、それにより激しい腹痛しきを起こし、自らの死期が近いことをさとります。

お釈迦さまの足取りはさらに重いものとなり、カピラワットゥまでもう一息のクシナーラーという町で進むことができなくなりました。その町の外れの沙羅しゃらの林に入り、お釈迦さまは頭を北に向け、右脇を下にして横たわります。その時、不思議なことに花を咲かせる時期で無いにもかかわらず、周りの沙羅の樹は白い花を満開に咲かせたと伝わっています。

死のそに臨んでもなお、お釈迦さまは弟子たちに教えを説き続けました。

そして夜遅く、最後の説法をされるのです。その説法の最後の言葉は、「では、弟子たちよ、私はそなたらに告げよう。つくられたものは、必ずいつか消えてゆく。おこたなまり怠けること無く、精しょうじん進せよ」

こうお説きになり、深い禅定を経て安らかに涅槃へむかい、そのままお亡くなりになりました。

こうしてお釈迦さまは八十年の生涯を閉じられましたが、そのみ教えは現代にいたるまで私たちを導みちびき続けているのです。

日本ではその日を二月十五日として「涅槃会ねはんえ」と呼ばれる法要を、お釈迦さまのご遺徳いとくをしのびいとなみます。